
理解不能

安坂 祐

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理解不能

【Nコード】

N5295G

【作者名】

安坂 祐

【あらすじ】

昼時の銀行。お金をおろしに来た私は不運にも銀行強盗にあつてしまう。男たちはここにいる全員を人質にすると宣言し、それは例外なく女である私にも振りかかる。強気な私は強盗犯達を刺激してしまうのだが、それがもとで人質1人が死亡するのだった。

見せしめ

それは昼時の銀行だった。

「そこを動くな!!」

何？

何が起きてるの？

「動くな!!動いたら撃つ」

ゴツい男は大声を出し銃をコチラに構える。
どうやら強盗だった。

ガサガサと男たちは銀行の奥の方へ進んでいく。

「よし、ここにいる奴らは人質だ。全員縛れ」

「は、はいっ」

リーダーらしい男が命令を下す。彼はマスクを被った男たちとは違い随分優男にみえた。

「ほら、じつとしろ」

それは例外なく銀行内にいた私にも襲い掛かる。人質の1人なのだから。

「・・・・・・・・」

「じつとするんだ!!」

「じつとしてるじゃないの!!」

「なにい。よく見ると貴様、なかなかかわいい顔をしてるじゃないか……」

「そんな目で私を見ないで」

私は男を振りほどく。

「ほう、そんなに強がってもいいのかな。お前は人質なのだ。ここ
で殺したつかまわないんだぜ。こんなに人数がいるんだ、1人位
目減りしても困りはしないさ」

「やめろ」

リーダーの男が鋭い目つきでコチラを睨んだ。

男もやれやれといった感じで私から離れる。

だが――

バーン!!

銃声が鳴り響く。

「う、う……なんで……」

「ひい……」

私は体をすくめた。目の前で人が撃たれた。腹から血を出して倒れた。

「死んだか」

リーダーの男が死体のクビ元に手を当て、呼びかける。

「この女のように少しでも強がってみる。お前らを殺す」

ここにいる全員の目が私を突き刺した。

身勝手な行動で1人が死んだ。私のせいだ……。私があのおじさんを殺した。

自分のまったく知らない人間だけど、殺した。

殺す理由なんて全く無いけれど、私は……。あのおじさんを殺したのよ。

理解できない罪悪感で私は狂乱しそうになった。

だが、その裏側で

次は誰が？

私にそれをとめることが出来るか？

いやそんなことはどうでもいいー『生きたい』それだけが今の自分

を突き動かした。

崩壊

事件発生から約1時間後。さすがに警察の包囲が完成していた。それでも犯人グループは焦りを見せない。勝算でもあるのか？私は疑問を持った。

「ちっ、動かないなサツ共」

「ああ。こっちは人質までいるつつうのによ」

「まあリーダーに従えばへまする事はまずねえよ」

「そうだな」

「ハハハハハ」

あれから状況は変わっていない。逆に言えば平和か。

私はあと何人いるか確認してみた。

ざっと、20人ぐらいはいるだろうか。

そんなときだった。

『太陽のかけら抱きしめて』
♪』

なんだか知らんが、誰かの携帯の着信音が鳴った。均衡が破れた瞬間だった。

当然、犯人達もこれに気付く。

「立て」

「は、はい」

40後半ぐらいの女がブルブル膝を震わせながら立ち上がる。

「携帯をよこせ」

「ど、どうぞ」

「それだけか」

「はい」

「本当にそれだけか」

「本当にこれだけです」

「もう終いでいいよな」

「えっ？」

パーン！！

その女は脳天を貫かれた。死んだ。

これで2人目である。

瞳孔が開き切った状態でその女はぐったり倒れている。

普段は見ない人間の姿に皆絶句した。

直視できないもの、あまりの緊張と恐怖に涙を落とす者、中には嘔吐までするものも現れた。

だが、そんな状況の中でも自らを失わない者もいた。

「なんで殺したの？」

私の前にいた制服を着た女の子が男に尋ねた。

「理由は無い」

「そう・・・悲しいわね。そんな簡単に引き金^{ひと}が引けちゃうなんて人間として狂ってる」

「そうか、狂っているのか僕は」

私は初めて見た、リーダーとおぼしき男が話すところを。

「じゃ、ゲームをしよう」

「ゲーム？」

「そうだ。どっちが正しいのか決めようよ」

「受けて立つわ」

「待つて!!」

私はもう我慢できなかった。

だって、自分より若い子なんだよ・・・それなのに・・・
こんなことに巻き込まれて死ぬなんて、どうかしてる。
止めるのが私の使命だった。

「なんですか」

「もう、止めて。これ以上悲劇を見たくないの!!」

「だってつまらないよ。なんにも起きないし」

「そうですよここでアタシが『ゲーム』に勝てば、ここから救われるかもしれないに・・・なんで、邪魔するんですか」

「嘘よ」

「へ？」

「あなたはゲームに負けるわ。かなりの高確率で」

「そんなのやってみなきゃわからないじゃない!!」

「そんなに死にたいの？」

「・・・・・・・・・・」

「茶番劇は終わりかな」

「ゲームは無しよ」

「それはダメ。だって、その子は僕の機嫌を損ねたんだよ。本来

なら死んじゃってるよ。

それを『ゲーム』という形で無かったことにするんだ、なんて親切なんでしょう」

「なら、私が受けるわ。その代わり……あの子は許して」

「いいよ。じゃ、始めよう」

男はリボルバーを取り出し、玉を入れた。

「この銃に玉を3発入れた。この銃は玉が6発入るやつだから、空が3発分。」

計算すれば分かることだけど、キミが生き残る確立は50%ってことさ」

すると男は私の額に銃口を当てる。

そしてーパン。

「ラッキーついてるね。君の勝ちだ」

「……………」

「どうしたの嬉しくないの」

「私が勝つたらどうなるの？」

「これから見せるさ」

男はあの部下たちを呼んだ。

何だ何だと集まる男共。

集まったところで、リーダーは次々に部下たちを殺害していった。

何故だ！！何故なんだ！！

よくも分からなく、殺されていく部下達。

私の周りは死体と血で埋まった。

崩壊した。均衡が崩壊した。世界が崩壊した。

犯人は単独犯となり、私の前にはケラケラと笑いながら人を撃つ男の姿が映った。

実に愉しそうに殺しを行う。

まるで、血を見るためだけに生きてきたように。

理解できなかった。

消された光

あれから3時間。

いままでの死亡者は・・・もう数え切れないことになってる。
生きているのは私と数人の人質、あと犯人グループのリーダー。
部下は全員殺された。

それでも、主導権は彼が握ってる。何か物音1つでも立てたら殺されそうだった。

みんな静かだ。みんな目をつぶってる。そんなに目の前を見たくないのだろうか。
そりゃ、そう。目の前にあるのは死体の山なんだから。

それでも全員、光を求めている。

人間、闇の中にいるほど光を求めたくなるものだ。私だって・・・
ここから生きて帰りたい。

早く警察はまだなのか。焦りが人質の中にも芽生え始めていた。

「おい」

男が私に話しかける

「何？」

「外の奴らが動かない。どうすればいい」

人質に聞いてどうすんのよ!!

そう思いもしたが、ここは我慢、我慢。

「あなたが外に出ればいいんじゃない」

「そうしたいけど、部下はみんな僕が殺しちゃったからな……」

「じゃ、人質の中から1人選んでそれと一緒に外に出る。ついでにお金とか要求してみれば」

「それはいい案だ。じゃ、食いつきのいいキミなんてどうかな」

「あ、アタシですか……」

人質にはさっきひと悶着あった女子高生の彼女が選ばれた。

「ちょっと外の様子に出てくるから。じっとしててね」

犯人と人質の女の子は外へ出た。

犯人がいない銀行内。

みんなほっと一息つく瞬間でもあった。

私もそっと胸を撫で下ろす。

出てきてから30分後――

休息の構内は一瞬にして闇につつまれた。

パーン！！

銃声がした……。まさかとは思っけど……

「やっぱりダメだったね」

彼女は死体になって、ここに帰ってきた。

理解不能

もう、どれくらい経っただろうか……意識がもうろうつとしてきてる。

生きてる人質は――

アレ？もう私、独りなんだね。もう、戻ってこないんだね。

すると、男が私に掴みかかった。

もう死ぬんだ、みんな死ぬんだ。私もあなた達と同じとこまで行くんだね。

はぁ……。一体私なんでこうなったのかな。もつと突飛に生きればよかった。

と意識が飛びながらも、最後の瞬間を待っていた私。だが、思っていた展開は違った。

「……………」

男は黙々と私の服を剥ぐ。抵抗も出来なかった。そして私をほぼ全裸にしてまた首元を掴まれた。

「苦しい……」

「そうか、これからもつと苦しいだろう」

「うつ」

男は私の唇に舌を入れる。

そして私を押し倒してそのまま乳房を愛撫する。

「あつ……」

「どうだ、苦しいだろ。生きてるだろ、悔しいだろ」

私はもうろうつとする意識の中、彼の意識を感じ取った。言葉では受け止めきれない事を体中で感じ取った。

「し、してほしい？」

「そんな言葉は聞きたくない。もっと自分をさらけ出せ」

「あつ・・・う、ああ」

私にある体力の限界でその日は彼を愛した。

だが、長くは続かなかった。

その後彼は頭を抱えながら苦しみだした。

「う、ううやめろう、ボクに入ってくるな!!」

突然の台詞に対応できなかった。

しかし、それでも彼の苦しみは人智を超えた痛みのように感じられた。

「はあああああ、痛い・・・・苦しい」

「何があつたの？」

「ボクに近づくな!!」

心配しても彼は私を振り払う。

私も体力が限界に来てるので何も出来なかった。ただ、そこですうと見ているだけであつた。

「何だよ!!何なんだよ!!誰の仕業だよ!!」

「あ、アナタよ」

「ち、違う・・・ボクは・・・ボクはこんな人を殺すような人間じゃない」

「でもそうなの」

「違う!!」

私も何がなんだか分からなくなってきたが、彼が本当の姿だということには気付いた。

「もう、そんなに自分を否定しないで。存在が消えるわ」

私は最後の体力で彼を抱いた。

「何で・・・何でキミは裸なの」

「よく分からないけど・・・アナタは初対面の私を精一杯愛してくれた」

「そうか。謝らなきゃね」

彼は涙を流す

「いいの。私もよかったから」

「分からない。分からないよ。この世は『理解不能』だ」
パン！！

彼はこめかみを撃って自殺した。

血飛沫が顔に飛び散る。

私は倒れた。

どうやら、疲れたみたい。

でも死んでない。生きている、心臓は動いてる。

彼の意志も私のからだを駆け巡っていた。

理解不能（後書き）

一応、ストーリーはこれで完結です。
ですが補完する形で続きの話も書いていけたらなと思います。
どうもありがとうございました。

あとがき

はい、どうも早川です。

なんというか、大変グレーなものを描かせていただきました今回は。と言ってもこの展開はこれからも続きそうですが。

これでメインの話は終わりなのですが、まだ不十分（自分的に）なところも多々あったので

そこを補完していきたいとおもいます。

いわゆる、後日談・アフターストーリーです。

ちなみに次の話は主人公が『私』から『府中』という青年に変わります。

視点が大きく変わることになります。

ストーリー的には事件を乗り越えた私と府中が協力してこの事件の裏に隠された真実を

探し出すというお話です。普通ですけれども。

でも、本編とはかなり対照的にはなってくると思います。

正直、構想の段階ではコッチをメインにしようと思ってましたがこれを先に持ってきたら話進まないことに気付いたので、これはまあ後日談だなということだ

もの凄く長くなりそうな話をいちいち後のほうに回したというわけですよ。

府中はこれからの作品にも登場する『早川作品』の中のキーパーソンの1人ですからね。

最後になりましたが、最後の話は少し性的な要素を混ぜてみました。こういう表現は初めてなのですが、まあこの話を引き立たせるということで挑戦しました。

ここでこれを投入したのには大きな伏線が含まれているからです。
ただ、やりたいからと言ってやったわけではないんですよ。
そこは後日談で描くとして……

ええ、これ以上話すとネタばれになるのでここまでにします。
それでは次の作品で！！

府中という男

事件の後、正式に警察の捜査が開始されたが証拠も掴めず事件は迷宮入りかに見えた。

だが、それでも捜査は続けられた・・・今度は国の手によって。

とある秋、一人の女が『事情聴取』という名目で警察署に向かった。形式上は任意であるが、時は一刻を争う。

この事件のキーとなる人物をのうのと放っておくわけには行かなかった。

「とりあえず、名前をお願いします」

「・・・・・・・・」

女は下をうつむきながら口を閉ざす。

「それではYesかNoでいきましょう。」

Yesなら頭を縦に、Noか答えたくないならなら何もしないでください。

あなたには一応黙秘権がありますから」

刑事お得意の誘導尋問というやつだ。

「それでは始めます。名前は・・・中村千栄さんですね」

女は頭を縦に振る。

「次に、あなたは今年の夏発生した銀行襲撃事件において最後の生存者と聞いていますが」

それには間違えはございませんか？」

女はまた頭を縦に振る。

「では単刀直入に申しませう。あのときアナタと犯人との間になが あったんですか」

「・・・・・・・・」

女は閉口する。

（くっ・・・やはり無理か）

どうやら彼女はある事件以来、失語症になっってしまったらしい。医者からの情報によると事件の直後PTSD（心的外傷後ストレス障害）の症状が現れた

らしく、丸一日は精神も安定せず発狂状態になった。

それから少しして精神が安定してきたころには、彼女は話すことを拒絶していたのだ。

このこともあってか、警察も重要参考人だということがわかっていくのに手が出せなかった。

だが、今回は違う。

とりあえずでもいいから、彼女から少しでもあの事件のことを聞きます。

その任を任されたのが担当になった府中という男だった。

「それでは少し話を変えましょう」

府中は薄暗い部屋の窓をあけながら話し始めた。

府中という男（後書き）

評価ありがとうございます!!

これを励みにして頑張っていきたいと思います。

妹。

「実は僕、被害者側なんですよ」

府中は窓の外を眺めながら言った。

口にはあらわさないが千栄も驚いていた。

「あの事件で妹を亡くしましてね・・・脳天を鉛球で撃ち抜かれたのがどうも悪かったらしいです。

アイツまだ高校生になったばかりで『友達たくさんつくるんだっ！』って楽しく学校生活を送ってたらしいんですけどね・・・それがこんなことで途切れてしまうなんて、思いもよりませんでしたよ」
「・・・・・・・・」

千栄は涙をポロポロと机に落としていた。

「どうかしましたか」

つかさず、府中も自分のハンカチを差し出す。

「ごめん・・・なさい」

「へっ？」

「ごめんなさい」

ただそう言っただけであつた。

「何か事情でも知っているんですか？」

「私のせいなんです。私が止めていたら、あの子は・・・」

「そんなことはないですよ」

府中はやさしく微笑む。

「悪いのは犯人。いや、そうさせた社会なんだ。

だから、もう、誰が悪いとか、責任とかそんな事言つのやめましょ」
「よう」

「中村千栄か・・・・・・・・」

調書を見ながら府中はぼそりと呟く。

彼女が帰った後、彼は妙な感覚に取り憑かれていた。

やはり彼女が全ての鍵を握っていることは周知の事実だが、それ以外にも何かある気がしてならない。

裏に隠された大きな真実――それを暴かなければこの事件の解決には至らないだろう。

彼女のこともそうだが、最も不思議なのは逆に犯人の方であった。身元は判明したもののそれ以外が跡形も無く消え去っていた。

今のところ分かっていたのは彼が何らかの薬物を服用していたことそして、部屋に『理解不能』とかかれた走り書きがあったただけだ。交友関係も探ってみたものの、普通の心優しい学生だったということしか分からない。

むしろ余計分からなくなった。

さまざまな謎が複雑絡み合い、交錯している。

第一線の刑事たちもこれにはお手上げで、もう捜査を打ち切るべきだという意見もでた。

だが府中はこれを許さない。

自分の妹が死んだのだ。せめてもの手向けとして真犯人を見つけ出す。

真夏の警察署で彼は1人闘っていたのだ。

ここから

もう、蝉たちが鳴き始める季節になっただろうか。なんの打開策も見つからずに彼岸が近づいてきた。

「あと、もう少し・・・もう少し時間をくれ」

鈍く光る墓石の前で府中は手を合わせる。

こうしてなにか行き詰ると妹の墓にお参りするのが日課になってしまった。

だが、今日は何か違った。

「あの・・・ご親族が何かでしょうか？」

そう言うのは、黒いフードを着た金髪の男の子だった。

年は自分の妹と同じ年ぐらい。

花束を手向け、軽く手を合わせるとその男は早々と帰っていった。まった。

友達か何かか・・・と思うのが自然であったが、府中は何か引っかかっていた。

次の日、府中は千栄と会うことにした。

もう一度彼女の口から聞いただす事があった。

「すいません、こんなところまで呼んでしまって」

「いいえ。それで何か？」

「最近、誰かにつけられてませんかね」

「特には」

「そうですね・・・では、黒いフードを着た金髪の男を知りませんか」

「それもわかりません」

「他には最近回りで変なことか起きませんでしたか？」

「変なことかどうかわかりませんが・・・夢を見るんです」

「夢？」

府中は言葉を疑った。

「夢の中でよく手帖を見るんです」

「手帖ですか・・・それだけ？」

「それと・・・ときどき変な男性の呻き声^{うめ}を聞くんです。すごく苦しんでるようでした」

「そうですね。ありがとうございます」

「あの・・・1ついいですか」

「はい？」

「私にも協力させてください。私も力になりたい、あの子のために」

「もしかしたら貴女に危険が及ぶかもしれない」

「だからこそ！！独りじゃ怖いの！！今にも崩れそうなの！！」

そついうと千栄は涙をポロポロと落とす。

「大丈夫。もう、大丈夫・・・これから私が側にいますから」

府中は落ち着くまで、やさしく千栄の肩を抱いた。

偽りの濃霧

「どういうことですか」

「キミに援軍ということだ」

「今さら・・・」

府中は朝、自分にパートナーが出来ると言われた。

今さらといった感じで、府中は激しい憤りを隠せない。

だが、ここになって何故自分に部下が入ったのだらうという疑問も生まれた。

誰からも見捨てられた事件。

今になって捜査なんてしようものが無い。

やはり誰かの意図を感じずに入られなかった。

そんなときだった

「どうも、府中さんですね」

眼鏡をかけた男が自分に挨拶をする。

だぶんこの人物が例の部下なのだろう。

「はいそうです」

「どうも、私、本庁から配属されました朝霧 士つかさというものです。
よろしくお願い致します」

と言うと丁寧に右手で敬礼する。

「まあ、廊下じゃ話づらいだろう。部屋に入ろうか、暑いし」

「失礼いたします」

部屋に入ると2人は向かい合い、話し始める。

「はあ・・・鍵かけたよな」

「当然です」

「よくできた奴だ」

「そういうアナタだって、スパイとしての職務をまっとうしている
じゃないですか」

朝霧は微笑む。

「おいおい、盗聴器だつてあるかもしれないんだぞ」

「大丈夫ですよ。どうせ、ココに来るときちゃんと調べたんですよ。
公安調査庁の府中さん」

「同じ穴の貉だろ」

「そういわれればそうですね」

「さあ、捜査に出ようか」

「はい」

そういうと2人は署を飛び出し、因縁のあの事件現場に向かった。
新しい翼とともに。

燃え上がる羽

「まだ残ったんですね、ここ」

「そうでないと困る」

「でしょうね」

この場所―この銀行で惨劇は起きた。

彼女1人を残し、人質、犯人に至るまでも全て死亡。

この不可解な事件、全てはここから始まった。皮肉なものである。

「現場検証はもう終わっているが、まだヒントはあるはずだ」

「そうですね・・・と言いたいところですが、変じゃないですか？」
朝霧があることに気づく。

「どういうことですか」

「大規模な殺人があったのに・・・小奇麗が過ぎませんか？」

「そりや・・・捜査の終了後に掃除でも・・・って事件現場を掃除するなんてことは普通しない」

「そうです、かなりの人数が死んだのに血糊もこれだけしかない」

「確かに、床には大量の血糊がついてるが、飛び散った形跡はない」

「彼女の証言からも人質は銃で殺されたと聞く。なのに、何故誰も気づかなかったんだ」

「それは彼女が証言しなかったから」

ココに来て不可解なことの合点がついた。

大きな一歩である。

「だったら、ココに証拠は―」

「無い・・・ですね。恐らくは、揉み消されたんでしょう、内部の人間に」

「そんなバカな」

一気に絶望感が襲う。

「僕らが警察に来た理由も―警察内部に犯人、いや黒幕がいるから」
「だから外部に来た俺らに任せるってことか。納得だな」

「はい。ですが、可能性は0じゃありません。もつと探すべきかと」
「それはいいが、何か臭わないか朝霧」
「臭いですか」

府中は目をつぶりながら、臭いを確かめるとすぐに分かった。
ガソリンとかそういった燃油系の臭いそのものだった。

「逃げるぞ」

「えっ？」

「いいから、逃げるぞ」

「は、はい！！」

それから2人は必死になって銀行の出口を目指した。

府中は気づいてしまったのだ。

ここが爆破されることに、限りなく真実に近づいていることに。
ドーン！！

2人が銀行を出たとたん銀行が爆発し、大きな炎となって燃え上がる。

灰が羽のようにヒラヒラと2人の頭上に舞い降りた。

「燃えちゃいましたね」

「ああ、燃えてるな。朝霧、すまないが119だ」

「了解です」

「これでまた、振り出したな・・・」

その後、すぐに消防隊が駆けつけ無事鎮火した。

人も2人以外いなかった為、けが人もいなかった。

ただ、それだけが唯一の救いであろうか。

変わる運命

「それで、うまく証拠は消せたかね」

「はい」

「そうか・・・ご苦労だった」

暗い部屋でひっそりと、紅茶をすすりながら男は話す。

「ですが、何故あんなところにあの方が・・・」

「さあな。だが、これもあの方の指図。何か考えがあるのだろう」

「だったら、僕は自由にやらせてもらいますよ」

フードをかぶった少年が切り出す。

「好きにしろ。我々は何も言えん」

「フツ。どうも」

そういうと、少年はゆっくり闇の中へ消えていった。

「暑いな」

「暑いですね」

「なんとかならねえのかよ」

「なりません」

暑い、署の中2人は愚痴をこぼす。

なぜならエアコンが壊れてしまったからだ。

代わりに扇風機があるものの、それだけではやはりキツイ。

部屋は暑いし、現場は派手に爆破されるわけで2人はいろいろと困憊しきっていた。

「どうしましょうかね・・・」

「どうにもこうにも、詰んだじゃねーの、コレ」

「だいぶやつれてますね」

「とりあえず、駄目元で聞き込みでもするか」

「そうしましょう」

嫌々ながらも2人は熱砂の街角にくりだした。

「どうだった？」

「テンで駄目です」

「そうか・・・」

と、やってみたものの、やはり確証のあるものは掴めなかった。
そんなときだった、

「すまん、ここで待ってろ」

「えっ、どこに行くんですか府中さん」

府中は朝霧を置いて走り出す。

何か気になるものがあつた。

「はやりな・・・」

彼が走った先で見たのはあのフードをかぶった少年だった。

「見つけたぞ！！」

府中は突然少年の腕をつかむ。

だが、少年の顔はフードで見えなかった。

「まあ、そうあせらずとも」

「！？」

少年のあまりの冷静な対応に府中もふと我に返る。

「す、済まなかった」

「で僕に話があるんでしょ」

「ああ、そうだ」

「でもいいのかな・・・こんなところで油を売って」

「どういうことだ」

「早くしないと、運命を変えられない」

「何を言っている！！」

「早くしないと、彼女死ぬよ」

「それは中村千栄のことか！！」

「フツ。僕が言えるのはココまで、そんじゃね」

「ま、待て！！」

その瞬間、視界が真っ暗になり――

「き、消えた・・・」

謎の言葉を残して少年は消えた。

幕の下ろし方

「どうしたんですか、府中さん」

「それどころじゃない、大事な参考人が危ない」

府中はかなり焦っていた。

もし、あの少年の言ったとおり彼女が死ねば、本当に詰んだ状態になる。

最後のキーは彼女が握っている。

まだ主導権は見えない相手が持っている。

絶対に死なせるもんか！！絶対に！！

府中は携帯で彼女に連絡を取るが、つながらなかった。

「緊急事態だ、とにかく彼女の家にいそぐぞ」

「はい」

彼女は都内のマンションに住んでいる。

ここからならまだ間に合う。

2人は必死で彼女の自宅に向かった。

「ここがそうだな」

ちゃんと『中村』と彫られている。

府中は家のチャイムを鳴らした。

ピンポン・・・

「ダメだ出ない」

「ドア開いてますかね？」

「開けてみよう」

ドアを開けると鍵はかかってなかった。

だが、逆にコレは2人の不安を煽った。

「中村さん！！」

2人は家に入ると、すぐに机に横たわっている彼女の姿を目撃した。横には注射器があった。

「とにかく彼女を病院へ」

「ああ」

幸いにも近くに病院があつたので、そこに搬送した。救助を待つよりかそちのほう及早かつたからだ。

その後医者判断で、集中治療室に送患されなんとか一命を取り留めた。

原因は『薬物中毒』。

急激に薬物を体内に注入したことによるショック性の中毒症状であつた。

彼女が治療しているときこんな話をしていた。

問題の『注射器』である。

「朝霧、注射器ちゃんと持ってきたよな」

「はい」

「これ、公安にまわせないか」

「どうですかね・・・便宜上は証拠物ですから鑑識に見せないとヤバイでしょう」

「なら、彼女の病因を『持病』に出来ないか」

「どういうことです」

「元々持病持ちだったってことにしておけば、一応は誤魔化しがきく。持病なら証拠もない」

「では報告書には持病と書いておきます」

「ああ、あとお医者さんにはカルテに『捜査上の協力』ということ
で原因は持病って書くように頼んでくれ」

「はい、そうしましょう」

「もう警察内部には信用が出来ない。こうなったら、身内で対応するしかないぞ」

「そう・・・ですね」

「舞台はもう終焉に近づいているか・・・ふう」

府中は大きく溜息をついた。

そして最後の賭けへ

数日後、病院から彼女が意識を取り戻したという報告が来た。

2人は急いで彼女の元に向かった。

「大丈夫ですか」

「はい、今はもう」

「では単刀直入に聞きます、あの日何があったんですか」

「…………それは私がちょうど晩ご飯の支度を始めようと思って
いた頃でした――

ちょうど宅配便が来て、ドアを開けたらその人にいきなり襲われ
て……

その後、持っていた箱の中に入っている注射器を取り出して私に
うつた。

それからは分からないんです」

「その男、フードをかぶった少年じゃないですか？」

「それは違うなあ」

いきなり後ろから、声が聞こえた。

そこにいたのはその『フードをかぶった少年』だった。

「何故ココに」

「ただのお見舞いさ。ああ、あとは運命を乗り越えたお祝いかな」

「どういうことだ……」

「キミは本来なら死ぬはずの彼女の命を救った。シナリオは書き換
えられた」

「……ここは病室だ、外に出ようか。朝霧は彼女の様子を見てお
いてくれ」

「は、はい」

2人は病室を出ると、さらに話は続いた。

「銀行を爆破したのはお前か？」

「それも違う。ボクは傍観者なんだ―そんな派手なことはいらないよ。ただ、今回はちよつと危なかったかな。あの人があんな前に出てくるとは思わなかったよ」

「あの人とは誰だ」

「それは言えないな、どちらかというと『今はまだ言えない』かな」

「まだ、言えないか・・・」

「まだ時期尚早だ。それに・・・これはこんな簡単に解ける事件でもない。」

それにキミは本当の革変者じゃない」

「という事は、今回の銀行の事件―犯人がいないということになる」

「そういうことだね、残念だが。まだ真実にたどり着くには証拠が足りない」

「皮肉だな」

「だからこそ、次に来るであろう『英雄』のために僕らは準備をしなくちゃいけない」

「英雄？」

「ああ、やってくる。それも近いうちに。僕のセンスがそういつてる

僕は・・・普通じゃないから」

「はあ・・・俺はもう疲れたよ」

9月、府中は警視庁から公安調査庁に転勤を命じられた。

古巣に帰ることとなった。

「よくがんばってくれた」

「いえ、私は非力でした・・・」

府中はうつむく。

「それでまた君に頼みごとがある」

「何でしょうか」

「君の防衛省への異動が命じられた」

「軍属になれと」

「察しがいい」

「正確には府中一尉として新設される『自衛隊特別戦略研究所』に配属になった」

「もう疲れました」

「そういわず、頑張りたまえ。もうじき子どもも生まれるそうじゃないか」

「だからこそです」

同日、1人の青年が山梨の小さな小学校に教師として赴任した。
理解不能 完。

そして最後の賭けへ（後書き）

これでこの話は完結です

あとがきがまだありますから、よかったらどうぞ

後記：戦いはまだ続く的な終わり

はい、衝撃のラストでしたね

手抜きにもほどがあると思いました

ちゃんと考えず突っ走った結果がですね、どうも

一応、物語はこれで完結するのですが

まだ続くよ的な終わり方ですね。

まあ実際問題まだ終わりとは考えてませんが。

他にもいろいろ描きたいと思ったら、一応これは「長くなりそうだから」という理由をつけて押し込めちゃったのが、本音です。

いつの日かちゃんと完結させてやりたいと思います、ハイ。

今度は短編が多くなりそうです。

連載モノはもうこりこりです。

今でもう3つぐらい掛け持ちですから、殆ど連載が止まっているわけですよ。

忙しいし、ネタが無いし（ちゃんと考えてないというものあるけど）結果的に「もういいや」と投げちゃうわけです。

僕の悪い癖ですねどうも。

一番評判のいい？作品をこのような形で終了（凍結に近い）させてしまうのは大変残念です。

本当にこのような釈然としない感じで申し訳ありません。

この場を借りて謝罪します。

これからも気長に末永く私の作品たちをよろしくお願いいたします

早川 楓

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5295g/>

理解不能

2010年10月28日08時25分発行